

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(平成 25 年度第 3 回研究会)

日時:平成 26 年 3 月 29 日(土曜日)午後 2 時より午後 7 時

場所:東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

1. 重松伸司(AA 研共同研究員、追手門学院大学名誉教授)

「南インド内陸農村における農村悉皆調査——タミル村落 I 村の農村慣行について——」

報告者は、1987 年～1989 年の間、3 次にわたって断続的に南インド内陸農村の悉皆調査を行ってきた。本報告は、その調査資料をもとにしたデータベースの一部である。

1. 本調査の意義

本調査が対象とする **I. village** とは、南インド・タミルナードゥ州セーラム県の中央部に位置する内陸亜熱帯気候帯の一乾燥農村である。この村は南インドの歴史社会において重要な意義・位置を占める。すなわち、

1) 本調査が対象とするセーラム県とは、マドラス管区の徴税官(後に管区総督)トーマス・マンローによって、19 世紀初期に実施されたライーヤトワリー制度揺籃の地である。本徴税制度は、ベンガル管区のザミンダーリー制度とは対照的に、「個別土地所有者=実態的な土地耕作者(**raiyat-war**)=直接的な地稅負担者と規定する。制度はその後 20 数年ごとに試行錯誤を繰り返しながら、独立直前まで持続した。では、このライーヤットとは何か、また今日の土地制度にどのような影響を及ぼしたのか。その解明の手掛かりが、本調査の中心となる I 村にあるのではないかと考えている。

2) 本調査が対象とするセーラム県では、イギリス支配前より、ヴェラーラ・ガウンダあるいはコングー・ヴェラーラの自称・他称をもつ「非バラモン・ドミナントカースト集団」が圧倒的に力をもっていた。

では、この社会集団が今日どのような社会的・経済的権限をもっているのか、I 村の事例から明らかになると考えている。

3) 本調査が対象とするセーラム県から、20 世紀初頭以降、ヴェラーラ・ガウンダなどの集団が東南アジア・セイロンへ多く移民している。この移民集団の社会・経済的構造と、周期的な移民動向の解明によって、インド人の地域的・国際的移動のメカニズムが明らかになるのではないかと考えている。

2. 本報告の概要

1) 本報告では、別添英文要旨の内、**C. Summary of Contents** の **III. Rural Survey of I. Village, an Overview** を中心に説明した。具体的には、1 村 7 集落、581 家族、1184 名について、職種(約 20)、ジャーティー名称(17)、1 家族当たり構成員(男女別・主たる生計者・

主職種)、戸別土地所有面積(水田、畑地別)・所有井戸数・所有果樹(種目・本数)・所有家畜頭数、主要作物種(約 14 種)、年間所得(概算ルピー)などである。

2) 本報告は、全データの定量的解析を行ったものではなく、7 集落の内のひとつ、H 集落に限定される。その分析結果によれば①家族構成員については、カースト(ジャーティー)による家族構成員数に顕著な差はなく、1 家族平均約 4 人、②主たる労働力は、1 家族当たり約 2 人、また、③土地所有面積については、全水田面積の 99.7%及び全畑地面積の 89.2%、全井戸数の 98.8%をガウンダー集団が占有していることが明らかになった。

3) こうした傾向が、他の 6 集落に共通するの、あるいは、特定集落に固有の状況なのか、全村の多変数(項目)相関分析が今後必要となる。

英文要旨

Historical Transformation of South Indian Village System

-A Database of the Comprehensive Rural Survey of *I. Village*, Salem District-

By SHIGEMATSU Shinji

A. Research Objects-Database of a South Indian Village-

A-1. Salem District in Tamilnadu

1. "Birth Place" of Raīyatwāri Land (and Revenue) System

2. "Subtropical" Zone (Dry Season-dominated Areas)

- S-W Monsoon (6-8 months) and N-E monsoon (10-12 months)
- Rain fall: 500mm~1150mm

Repeated Famine: 1866, 1877-78, 1891-92, 1923, 1937 and 1984~1987)

3."Typical" Non-Brahmin dominant Castes (Vellāla Gounder) Areas

(4. Voluminous Population of "Migrants" (to Malaysia, Ceylon and partly Africa)

(5. Geo-economic and Geo-social "Diversities" of South India

A-2. Bāramahāl District and Konkū Nādu in South India (*Map 1*)

1. the Dominancy of Kongū Vellāla or Vellāla Gounder?

2. What is the "Raīyat"?

Raīyat=Cultivator? = (small) Land Holder? =Revenue Payer? =Vellāla?

3. What is the Raīyatwari System as a British Land System?

Repeated reforms of System in 1790's, 1820's, 1850's, 1890's, and 1910's~

4. How British Land Systems influenced on the contemporary land holdings and migration from south India?

References: ⑧⑨⑩

B. Survey Method and Empirical problems of Survey Data

Field survey of I. Village as "a trial pit" of South Indian Village systems

1. Differences :Census/ FMB(of Village Administrative Office)/ Field Survey

2. Comprehensive Survey of whole Village by Household and family members
1 village(Ūr)>8 hamlets(ūr)>16Jātis>1, 184 Household> population of
4,642(M 2,272, F 2,370) in the register book of VAO=Sri Karnika caste)

C. Summary of Contents

I . Pre-conditions of Rural Survey of *I. Village*

Village in South India (*Map 2*)

Ecological Background (*Map 3*)

Irrigation Systems-River, Canal and Tube Well (*Table 1*)

Irrigation Systems-Open Well and Tank (*Table 2*)

Major Crops and Acreage (*Table 3*)

Geo-Political Location of *I. Village*

References: ②③⑦

II . Historical Background of *I. Village* in South India

“Bāramahāl District” in British Period =”Kongū Nādū” in Pre-British Period

Raīyatwāri Land system in British Period

Dominant caste of Vellāla Gounder, a Non-Brahmin Group

References: ①②④⑤⑥

III. Rural Survey of *I. Village*, an Overview

1. Period of Survey

2. Survey Map

3. Survey Matrix

4. Tables of Rural Survey (extract)

Field Note 1~13

References: ②③⑫⑬

IV. Migration, Land System and Ecological Conditions

Why Migration from *I. Village*, 1830-1940?

Land Transfer and Land Holdings

Ecological Situations

Rainfall and Dry-Wet Conversion, 1830-1940

How Village System Changed?

References: ⑪

.....

List of References:

- ①Salem District Manual(1883);② Salem District Gazetteer (1918, 1967);③Census of India (1981); ④Baramahal Records,1790-1799(1907-1922); ⑤Beck, Brenda (*Peasant Society of Konku*, 1972); ⑥Darma Kumar (*Land and Caste in South India*, 1965); ⑦Ludden David (*Peasant History of South India*, 1985); ⑧N.Mukerjee(*The Ryotowari System in Madras1792-1827*, 1962);⑨R.E. Frykenberg(*Land Control and Social Structure in Indian History*, 1969);⑩Firoj High Sarwar(*A Comparative Study of Zamindari, Raiyatwari and Mahalwari Land Revenue Settlements*: JHSS,2012); ⑪Shigematsu Shinji(『国際移動の歴史社会学-近代タミル移民研究』、1999);⑫Shigematsu Shinji(「カースト・階級・市-1」1988);⑬Shigematsu Shinji(「サーヴェイカースト・儀礼・村落秩序」、1990); ⑭Shigematsu Shinji(「インドの自然=社会複合生態系と開発-南インド・タミル村落 I 村のフィールドノート1-」、1994)

2. 稲葉穰(AA 研究共同研究員、京都大学)

「フーナとエフタル再考——北西インドの中央アジア系政権に関する最近の研究について——」

アフガニスタンに発するカーブル川が東流し、アトックにおいてインダス川に合流するまでの流域、いわゆるガンダーラは古来、中央アジアや西アジアの勢力が侵入し数多の政権を打ち立てた地であった。記録として残っているだけでも、アレクサンドロスの遠征後のギリシア人勢力、サカ族、クシャーン朝、キダーラ、エフタルといった人々がこの地を支配し、最終的にそれは11世紀以降のムスリム勢力による北インド支配に至る。とりわけムスリム支配以前の時代については、上記の諸勢力がどのような者達で、いかなる形で統治を行ったのかに関して、未だ多くが謎に包まれている。それでも1990年代以降のバクトリア語の碑文や文書に関する研究、および当該地域や隣接地域に由来する貨幣資料の研究の進展により、イスラム時代以前の北西インドの歴史の実態は徐々に明らかになってきている。本報告ではなかでも特に進展が目覚ましい、いわゆるエフタルに関する近年の研究動向と新たな方向性についてその概要を示したい。

かつて西暦5世紀後半から6世紀にかけてグプタ朝を圧迫し、その崩壊を招いたとされた異民族 "hūna" はいわゆるフンの転訛であり、同じ頃にアフガニスタン北部からイラン高原東部、トランスオクシアナを支配していたエフタルと同一の集団だと考えられていた。しかし山田明爾はすでに半世紀以上前に、インドの諸碑文に見える "hūna" とヒンドゥークシュ山脈北側に中心を置いたエフタルとは別個の勢力であったと指摘した。やや遅れて1967年に出版された *Dokumente zur*

*Geschichte der iranischen Hunnen*の中で、著名な貨幣学者ロベルト・ゲブルは、従来エフタル貨幣とされていた北西インド由来の貨幣群の中に、*alxan/alxanno*という独特の銘を持つものが見られることを指摘した。それらはヒンドークシュの北において発行されたと覚しき、いわゆるエフタル（近年では区別するために「純エフタル Genuine Hephthalites」とも呼ばれる）貨幣とは全く形式の異なる貨幣である。その後、このタイプの貨幣のサンプル数は飛躍的に増加し、形式分類に基づく編年も詳細に行われるようになった。ちなみにアルハン貨幣は表面に支配者の横顔が描かれるが、その多くにおいて人物の前頭部から頭頂部にかけてが異様に長く描かれる。現在この貨幣の研究を進めているウィーンの貨幣学者達はこれが、中央ユーラシアのいわゆるフン系の墓からしばしば発見される、人工的に頭蓋骨の形を変形させた人骨と関連があるのではないかと、つまりアルハン（貨幣を発行した）集団もその起源は中央アジアにあり、おそらくは北の「純エフタル」とそもそもは同じ起源を持っていたのではないかと考えている。「純エフタル」についても、これを民族集団と見るよりは政体とみるべきだという考えが受け入れられつつあり、要するに中央アジア東部から到来した集団が5世紀以降アフガニスタン北部や北西インドにおいて、いくつかの政体に別れてそれぞれ勢力を確立したと考えられるのである。その意味で、フーナとエフタルは別勢力であると見た山田の先駆的研究の意義は再評価されるべきである。

この点はさらに、2000年代に存在が知られるようになった仏塔奉献銅板碑文（現在はオスロのスコイエン・コレクションにおさめられている）の内容とも関連を持つ。グドルン・メルツァーによって5世紀末という年代が与えられたこの碑文には、Mehama, Khingila, Toramana, Javukhaの四人の王の名が記されているが、この四人はそれぞれアルハン型貨幣の発行者としてすでに知られていた。このことはアルハン勢力自体が、そのうちに複数の支配者を抱えるものであったことを示している。そうして以上のことが示唆するのは、北西インドに到来し、勢力を打ち立てた集団は決して単純な部族・民族集団であったのではなく、その内実は時に相対立し、時に連合するようないくつかの政体に別れていた、という状況である。

さて550年代、ササン朝を圧迫していた「純エフタル」勢力は、東方から新たに到来した突厥に滅ぼされる。それに先立つ530年代、北西インドから中インドにかけての広大な領域を支配していたトラマーナの息子MihirakuraはマンダソールのYaśovarman 率いる連合軍に敗北し、カシミールへと追いやられた。同じ頃、現在のカーブルからガズニにいたる東部アフガニスタンは、*nyčky MLK'* (<Nezakshāh) というパフラヴィー語の銘を持つ独特の貨幣を発行した集団が支配し

ていた。ゲブルは、このネーザクシャー 貨幣にアルハン貨幣の最後期のタイプのものが「重ね打刻 (overstrike)」された貨幣の存在をもとに、6世紀末、アルハン 集団がカーブル川を遡り、カーピシー/カーブル地域を征服したと考えた。最新の研究によれば、この集団を率いていた王はミヒラクラの息子トラマーナ であった。この「アルハンの西帰」（彼らはもともとカーピシー/カーブル地域から東へ進出していた）というシナリオは未だ仮説の域を出ていないが、周辺の情報といくつかうまくみ合うポイントを持っているように見える。

第一は、658年頃この地域を調査した唐の王名遠が、当時の屬賓すなわちカーピシーの王は、始祖馨摩から数えて十二代目だと報告していることである。馨摩はkhingilaの音写であると考えられ、もしこのKhingilaがアルハン 貨幣の発行者であり、上述の銅板碑文に名前のがる5世紀後半のアルハンの支配者Khingila と同一であるなら、7世紀半ばのカーピシー/カーブル地域の支配者がアルハンの系譜に連なる者であった可能性が出てくるが、658年以前のどこかでアルハン勢力がこの地域に到来したという仮説はその背景を提供しうる。

第二点はカーブルのハイル・ハーナ神殿における神格の交代という事件との関連である。1930年代にフランス隊が調査したこの遺跡は、上下二層の異なる神殿址からなっており、上層神殿からはスーリヤ神像が発見されている。桑山正進は考古資料と漢籍文献の詳細な分析により、この神殿こそが、隋書や玄奘の旅行記に見える「葱嶺山/阿路孫山」に他ならず、そこにおいて606年から629年の間に在来のZhūn神信仰教団が新来の太陽神信仰教団によってこの地を追われ、南方に移住したという出来事があったことを明らかにした。桑山はその背景としてなんらかの政治的な変動があった可能性を指摘しているが、その変動こそがアルハン 勢力の到来であったのではないか。アルハン 勢力と太陽神信仰の関連ははっきりとはわからないが、ミヒラクラの治世15年にグワリヨールに建立された太陽神神殿の銘文に彼の名が言及されること、そもそもミヒラクラという名前前半部 Mihira-は太陽神Mihraを想起させることなどは、中インドにおいて太陽神信仰がアルハンの王達の保護を受けていた可能性を示しているように思われる。そうであるなら、少なくとも太陽神信仰教団のある者たちが西方へと移動したアルハン勢力を追ってインドから到来したという事態は十分ありうるだろう。

以上の如く、バクトリア語文書、貨幣、その他の新出資料の解析により、グプタ朝後期から8世紀頃に至る北西インドの歴史は、ゆっくりとではあるが着実に解明されつつある。ただし、ここからさらに進んで、インドに進出した中央アジア系の部族由来集団のその後を考えるには未だ

材料が決定的に不足していると言わざるをえない。7世紀後半にカーブルに政権を建てたハラジュ族はもともとイシク・クル湖近辺にいたとされるが、彼らはカーブル王国滅亡後も部族集団としてアフガニスタン南西部の山岳地帯に居住し、ムスリム諸王国のもとで軍勢力として雇い入れられた。彼らの一部はゴール朝の傭兵として、遙かベンガルにまで到達した。13世紀には、インダス川流域で対モンゴル防衛線を張っていたハラジュ出身のアラー・アッディーン・ハルジーが強大化し、デリーに政権を樹立した。この事例は、一旦政治勢力が解体した後も、部族集団自体はユニットとして存続していたことを示唆しているようにも見える。しかしながら、一方でそれらがインド本地に入った後も果たして部族集団としてのアイデンティティを保ち得たのかどうかは今のところ十分わかってはいない。

3. 二宮文子(AA 研究共同研究員、青山学院大学)

「中間的集団としてのスーフィー教団—特徴と課題—」

本報告は、スーフィー教団の運営の様態を把握し、さらに教団の集団としての特徴と検討課題について整理するものである。

(1) スーフィー教団の運営

本報告で運営形態を検討する教団は、シャイフ（導師）とムリード（弟子）が、神秘的修行を目的とした指導関係を保っている、比較的小規模な集団を想定している。具体的に取り上げるのは、14-15世紀にデリーとグルバルガで活動したシャイフ、ムハンマド・ギースーダラーズ（1422年没）である。ムハンマド・ギースーダラーズはチシュティ派のシャイフであり、14世紀のデリーで最も著名であったニザームッディーン・アウリヤーの孫弟子である。当初はデリーで活動していたが、1398年にティムールによってデリーが破壊されたことをきっかけに同地を離れ、二年間の間にグワリヨール、チャンデール、グジャラートなどを転々とした。その後1400年にはバフマニー町の君主の求めに応じてグルバルガに移住し、そこで没した。

ムハンマド・ギースーダラーズの教団運営検討の材料としては、彼が1398年から1422年の間に、各地の弟子に宛てて書いた書簡を用いた。ムハンマド・ギースーダラーズはインド中部の遍歴中に各地で弟子を取り、直接会うことができない遠隔地の弟子に対して修行の指導、神秘思想の解説、教団の運営に関する指示などを書簡で行っていた。彼の弟子でハリーファであるアブルファ

トフは、師の死後に行ったメッカ巡礼の途上で各地のハリーファや弟子のもとを訪ねて師の書簡66通を集めて書簡集を編纂したのである。

書簡の宛先を整理した結果、ムハンマド・ギースーダラーズの教団運営において二点の特徴が発見された。第一は免状（書状・衣類）類の一元管理である。13通の書簡において、書簡の宛先以外の第三者へ免状を送ったという記述がみられた。多くは弟子入りの際であるが、修行の進捗に応じて特殊な衣類を送っている記録も存在した。それらの免状を第三者に与えるように指示されている人々にはハリーファも含まれる。原則として、ハリーファは師の代理人として弟子入りの儀式を行うことができるが、ハリーファが第三者と弟子入りの儀式を行う際にも、ムハンマド・ギースーダラーズからの免状が送付されていたことになる。ここから、彼は自らの教団メンバーへの免状類の発行権を独占し、免状の一元管理を行っていたとみられる。第二は教団運営のためのワキール（一時的代理人）の存在である。ワキールとされた人物に宛てられた書簡は合計16点であり、その中には、ハリーファではない弟子が第三者に対して弟子入りの儀式を行ったり、指導を行うように指示されている。これらのワキールは、新規メンバーの獲得や教義指導といった教団活動のために、シャイフであるムハンマド・ギースーダラーズが必要に応じて任命し、個別に指示を与えたものと考えられる。以上二点の特徴から、ムハンマド・ギースーダラーズの教団運営は、シャイフに権限が集中したトップダウン型のものであると結論づけた。

（2）教団の特徴と今後の課題

教団は本質的には神秘的修行を目的とするが、その他にも様々な社会的活動を行っている。それらの諸活動を分析する際に注目すべき点は以下のようなものである。

まず、別種の集団との重なりや関係性について。原則的には、スーフィー教団は出自に関わらず、神秘的修行を求めて選択的に参加できる集団と想定できるが、一家系やカースト集団が世襲的に一教団と関係を持つ辞令も見られる。参加者の自発性については、その都度検討していくべきである。さらに、一教団に多様な社会層の人間が参加できるのか、その場合参加者同士の関係はどのようなものになるのかについては検討すべき重要課題であろう。

次いで、スーフィー教団が集団としてどの程度統一性を持っているかという問題である。多くの教団において、遠隔地の支部は初代のシャイフの死後は独立性を強めていく。遠隔地の支部との統一性が世代を超えて保たれる例はあるのか、あるならばどのような条件のもとでそれが可能になったのかという点は、スーフィー教団を集団として捉えることが可能かという問題とも深く

関わっている。また、教団への参加が、神秘的修行以外の社会的活動や行動選択に及ぼす影響も、このカテゴリーに含まれる。

最後に、シャイフによる土地・施設経営と教団との関わりについても検討すべきである。教団の本部にはしばしば、初代のシャイフの廟が建設され参詣地となる。また、前近代、特にムガル朝においては、有力教団に対する土地あるいは徴税権の寄進が制度化され、多くのシャイフは世襲的地主でもあった。このような施設や土地の運営に教団員が関与する例はあるのか、また、経済的な地主・小作関係と、教団が提供する宗教的關係の間はどのような関係性があるのかという点についての分析は、教団の社会的影響を理解するためには欠かせないものである。